



## 福島原子力事故関連情報アーカイブ

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	福島県に生息する鳥類の放射性セシウム濃度について
Alternative_Title	Radioactive cesium concentration of birds living at in Fukushima Prefecture
Author(s)	斎藤 梨絵(福島県環境創造センター), 大町 仁志(福島県環境創造センター), 根本 唯(福島県環境創造センター), 溝口 俊夫(福島県環境創造センター) Saito, R.(Fukushima Prefectural Center for Environmental Creation); Omachi, H.(Fukushima Prefectural Center for Environmental Creation); Nemoto, Y.(Fukushima Prefectural Center for Environmental Creation); Mizoguchi, T.(Fukushima Prefectural Center for Environmental Creation)
Citation	第5回環境放射能除染研究発表会要旨集, p.21 5th Workshop of Remediation of Radioactive Contamination in Environment
Subject	セッション5: 食の安全・野生生物
Text Version	Publisher
URL	<a href="http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/109438">http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/109438</a>
Right	© 2016 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第5回環境放射能除染研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。 学会は発表の機会を提供しているもので、内容に含まれる技術や研究の成果について保証しているものではないことをお断りいたします。



## 福島県に生息する鳥類の放射性セシウム濃度について

○斎藤梨絵、大町仁志、根本唯、溝口俊夫  
福島県環境創造センター

### 1. はじめに

福島第一原子力発電所で起きた事故により野生動物、とりわけ食物連鎖において高次に位置づけられる生物への放射性物質の移行（生物濃縮等による影響）が懸念されている。

本研究では、生態系において高次種として位置づけられている鳥類に着目し、2011年から2015年にわたる事故後5年間の鳥類における放射性物質のモニタリング結果について報告する。

### 2. 方法・材料

有害捕獲・狩猟の対象となっているキジ類とカモ類を主な対象種とし、筋肉中に含まれるガンマ線放出核種を測定した。各鳥類の筋肉中に含まれる放射性核種のうち、物理的半減期が約30年と比較的長いセシウム137（以下Cs137）濃度を種間で比較した。

### 3. 結果・考察

キジ類のうち、生息環境の異なる近縁種ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii* とキジ *Phasianus versicolor* の2種について筋肉中のCs137濃度を比較した結果、森林生態系に生息するヤマドリのほうが、里地生態系に生息するキジに比べて、濃度が高い傾向が認められた（図1）。またマガモ *Anas platyrhynchos* とカルガモ *Anas zonorhyncha* の筋肉中のCs137濃度と比較しても、ヤマドリの筋肉中のCs137濃度のほうが高い傾向にあった（図1）。ヤマドリはキジと比べより森林を主要なハビタット（生息地）とすること、またマガモとカルガモは標高の低い平野部の水辺（湖沼、湿地など）に生息することが知られており、このようなハビタットの違いやそれに伴うエサ資源の違い、エサ中に含まれるCs137濃度の違い等が鳥類間での筋肉中のCs137濃度の差異をもたらした可能性が考えられる。

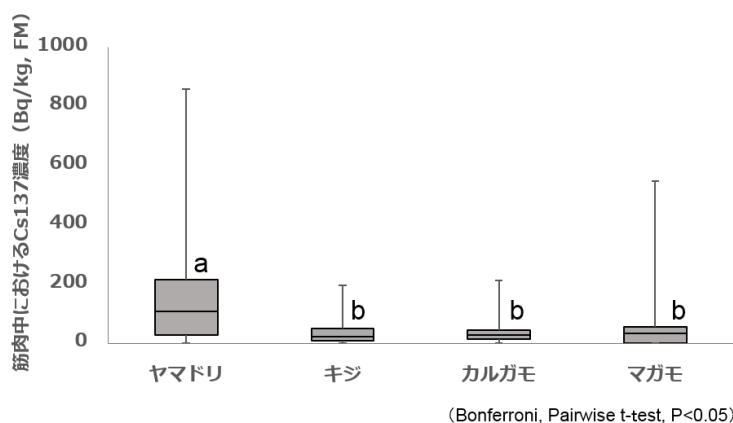


図1. 対象種（キジ・ヤマドリ・マガモ・カモ）における筋肉中のCs137濃度の比較